

跡見にとって「マネジメント学部」の存在意義

芝原 脩次

(1) はじめに

マネジメントを学び始めると「女子大生」にとって、これほど求めていた学問領域は無かったと思う。人生85年時代を生き抜いていく跡見生にとって、不可欠な「知識」「能力・スキル」「マインド」であると実感する。「生き抜く」ということは「選択」と「意思決定」の連続である。節目節目で「最適で最善の結果を得てもらいたい」。「女性の社会進出」が日常化しているが、それは表面的で一部エリートのための施策であって決して多数派の女性のものではない。いま必要なものは選択と意思決定のできる「マネジメント力」の育成である。

(2) 「マネジメントとは」(定義を考える)

2002年4月。日本初の学部となる「マネジメント学部」が誕生した。経営、経済、商学、法学が市民権を得た伝統的学部として定着した中で、マネジメントの学問領域の存在感を確立することが、新学部の課題であった。それは、まさに「学部の教育理念」と「コンセプト」「コンテンツ」の明確化と具現化であった。

ビジネス社会から着任した筆者にとって、「マネジメント」は日常用語で、あらゆる場面での万能薬的な行動様式・思考様式であった。しかし、学術的定義が求められると、多種多彩、多様な表現が出てくる。基本は「企業経営」をイメージした内容であるが、一方、時代は「キャリアマネジメント」「ストレスマネジメント」「育児マネジメント」「年金マネジメント」等々、あらゆるテーマに「マネジメント」が冠され、疑問なく通用している。

筆者は「マネジメントとは、『我々を取り巻く、いろいろな問題・課題についてその対応や解決を考え、その具体的な施策と将来に向けた方向性を明示し、実行すること』と定義している。マネジメントの父「P. F. ドラッカー」は、「マネジメントとは教養である。ものの見方考え方である」と言う。すなわち「生き抜く」ための武器であるという。

(3) 女性とマネジメント ～大学で何を学ぶのか～

マネジメントを深耕していくと、「教養」「ものの見方考え方」と「生き抜く力」の源泉を発見する。大学は多様な価値観を学び「ものの見方考え方」を習得し、人生を生き抜いていく力として「教養」を身に付ける場と時間を確保する存在と考え、と、「マネジメント」は大学生必修のテーマであると確信する。特に、人生で男性とは異なる「多様多彩な経験と選択肢に遭遇する女性にとって、「マネジメント専攻」の意味は深い。

(4) 跡見学園女子大学マネジメント学部の今後の発展と飛躍

筆者はここ10年「女性の時代・マネジメントの時代」を謳ってきた。啓蒙的な「女性の社会進出施策」を、はるかに先行して、「多数派の女性」達は「地域社会、企業人、家庭人」として「貢献・創造・感動」の場で元気に活躍している。「人的資源供給源」を跡見のミッションと捉え「凛とした女性人材の育成と輩出」を、学部10期生卒業に当たり再確認した。「マネジメント学部」のライバルは『学内や他大学ではなく「本学を取り巻く環境の変化とそのスピード」であり、「マーケットイン」の姿勢を貫くことである。

入口の「集客力」（入学したい魅力とコンセプト）⇒4年間の「感化力・育给力」（熱く語れる大学生活）⇒出口での「人材供給力」（世の中で通用し結果を出せる人材輩出）の考え方とインテグレーションシステム（一貫性）を提唱する。そのキーワードは「理論と実践」を具現化する『プロジェクトマネジメント』と『マネジメント学部』の発展である。 (完)